誘惑

猪野陽

誘惑
昭和四十九年二月二十五日発行
著者　猪野陽
東京都豊島区南長崎三-二六-八
発行者　前島幸視
発行所　国文社
東京都豊島区南池袋一-一七-三
長塚印刷＊並木製本

誘惑

猪野陽

国文社

目次

前書……7
娘・どろぼう……9
小鹿野町……49
野合……76
うじ虫……96
紙の人形……122
屑屋……136
*
蒼潮……151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

誘惑

前書

この本は小説といえるかどうか、ただ自分の思うままに書きなぐったもので、読みにくいと思うが、この中に出てくる話は、私の体験した事実に、いくらか粉飾をつけ、小説らしく書いたという点に御注目いただきたい。

私はこの本がでれば、もうこれで人生に思うこともなく、未練もありません。それだけにこの本は私にとって遺言ともいえるものです。

私には現在、娘が三人いますが、どれも遠くで生活をしていますので、事があったとしても、誰にも会えないでしょう。ということは、私は現在、ひとりで小さな店を守りながら、辛うじて生活をしているが、六十六才という年齢からして先が見えております。

ただ私の有がたいと思うことは、多くの老人が福祉事務所の厄介になっているか、又は自分の子供と一緒にいても、遠慮しながら余生を送っている者からすれば、住むところはあるし、別に食うには困らないし、気ままにひとりで暮しているということです。

もっとも私が不遜な人間でなかったらこんなに淋しいこともなかったでしょうが、性来、わが

ままで、勝ち気で、理屈っぽく、そして、法に触れない悪いことはし放題で今日まできて、なお、おとなしくなれず、強気一点張りで、人を頼るということができず、今になっても神や仏に縋る気になれず、一口で云って、ただ偉張っていたいだけの始末の悪い老人である。

だから誰も本気で私と交りをもつという奇特な人がいるわけがない。これは希む方が無理だということも、ちゃんと、わきまえている。

私の今の希望はただ一つ。この本ができたら、次ぎには、長編ものを書きたいと思っているが、さあ果たして、それまで生かして、おいてくれるか、どうか、危いものである。

読後の御感想をお寄せ下されば、私のこれ以上のよろこびはございません。

昭和四十八年十二月

猪野陽

娘・どろぼう

妻の多喜子が東京板橋区にある日大附属病院に入院したのは昭和四十七年の十一月の末のことでございます。病名は急性白血病でございます。

主治医の馬場先生から、それは先生もしばらくは躊躇しておりましたが、私が病名を知らされたときは、思わずきき返したものです。その一瞬はよそごとのような感じでございました。だが次の瞬間私の頬がこわばってゆくのが自分にもわかりました。

そして先生と向い合ってかけておりました椅子がかすかにゆれ、机にふんばった両方の腕が一べんに力が抜けたようになり、握った手の平に汗が、じっとりにじんでいました。

「万が一ということもありますから。」

先生は気の毒に思ったのか、視線を別のところにやりながらこう申しました。

先生も私も黙ったままが数分すぎました。

それから又しばらく沈黙がつづきましたが意を決した私は静かに先生に一礼をして立ちあが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

り、おいとまをいたしました。そして私は妻の病室に向いましたが、途中乱れた呼吸をととのえようと、長い通路を、ゆっくりゆっくり歩きはじめました。それでも胸の鼓動はなかなかおさまりませんでした。

妻の病室は六階の六Bですが、その室の前に立って、妻にどう云おうかと、言葉の糸口をあれこれとたぐっておりました。そうして私がためらっている間中も看護婦さんや白い上衣をつけた医者と思はれる男達が、たえず行ったり来たりしており、私の顔を、けげんそうにみてゆく看護婦さんもいました。

思い切って六Bのドアーをひらいた私は一生懸命に顔に笑みを浮かばせようとしましたが頬がひきつって思うようになりませんでした。しかし丁度都合のよかったことに妻が向うむきにねておりましたのでほっといたしました。

妻はすぐ私に気がついて床の上に起きあがり、私の顔をみると。

「あらっ!!どうしたの。」

「何が?」

「顔色が悪いわよ……。」

「う……ん……出かけに店が忙がしかったので、それにお前、バスが一ぱいでな。」

とっさにうまい事が云えたと、ほっといたしました。妻は勿論私が来るとき馬場先生に会ったことは知りませんでした。

「馬場先生があなたに話しがあるからっていってたわよ。」
「う……うん……。」
馬場先生は私にだけ病名のことを云っておきたかったので妻にそう云ったのでしょうが、来るとき先生に私が会ったことは全く知らない妻でした。ですから私は妻にはじめてそのことをきいたふりをして、しばらく間をおいてから。
「では行ってみるか、どういう用事だろうね。」
「わたしの病気のことかしら?」
「そうだよ、きっと、いろいろの検査はもうすんだろう?」
「はい……でもまだ沢山あるらしいですよ。」
「まあー行ってくらあ、中間報告ってことだろうよアハ……。」
私は妻によたを飛ばしながらドアーのトッテをまわしました。そして通路に出ると足早に歩き馬場先生の室とは反対側にある患者用の喫煙所に入りそこでしばらく時間を稼ぎことにしました。そして頃あいをみ計って六Bに戻りました。すると妻はしげしげと私をみておりましたが、それはまるで私の心の底をみぬいたような目つきでしたが、勿論それは私の気のせいでもありました。
「ばかだねー変な目つきでみるなよ、先生はまだはっきりとわからないと云ってたぜ、この前の病気の後遺症かも知れないってさ。」

妻は今から六年前に十二指腸潰瘍で同じ日大で手術を受けたことがありました。妻に先生からもその話しはあったらしく、だから妻は私の話をすなおに取ったらしい。

納得したらしい妻の笑い声も冴えてまいりましたので、私はこれでやれやれと思いました。

それにしても妻はどうしてあんな恐ろしい病気にかかったのかしら、私は馬場先生の見たて違いであることを神にねがわずにはいられませんでした。しかし、はじめの見たては近所のかかりつけの平間医院の先生が発見され、私だけに、耳打ちして早急入院をすすめて下さいました。白血球が二十万もあり、普通の人は七八千だといわれました。勿論私には白血球がどうとか、赤血球がどうとかはわかりませんが、七八千と二十万では段違い、これだけでも大変なことだということは想像できました。それが最後の宣告を下されたのですから私にとっては、死の宣告よりも身にこたえました。白血病のおそろしさは本で読んだり、人からきいたりしてすこしぐらいは知っておりましたが、他山の石と申しましょうか、野次馬根性と申しましょうか、別に気にもいたしませんでしたが、妻が現実にこの病気に患されるなんて、ただおののいたりあわてたりするばかりでございました。

思いますに私の過去は乱れに乱れておりましたので、もし仮りに、この世に天罰というものがありますならば、私は今その天罰を受けているのだと思いました。確かに私はこの天罰の当るに相応わしい悪い人間でありました。とは申しましても、神のくだされた試練にしては余りにもむごたらしい、余りにも惨酷すぎはいたしませんでしょうか。なぜ妻だけがこんな悪病にとりつか

れたのでありましょうか。どうか神様、おたすけ下さい。おねがいします、おねがいします。おたすけ下さいと念じないわけにはまいりませんでした。

苦しんでいるのは誰でもありません。悶えているのは誰でもありません。正しくそれは私でございます。全部の責めは私に嫁せられているのです。これこそ天罰でありましょう。よろしゅうございます。お受けいたしましょう。と心にきめた私でもございました。したがいまして私はそのとき以来覚悟はできておりましたが病気を妻に感ずかれてはならないと、その点にも悩みました。ですから、先生は申すに及ばず、看護婦さん達も随分気をつかっていて下さいました。又気をつけなければならなかったのは、お見舞いに来て下さる方々のことでありました。ですから極く親しくして下さいました二三の方に本当のことを申しあげただけでありました。

輸血の心配です。それは手術をするための輸血と違いまして、食事のように血が必要だとのことでしたので、それからの私は血を求めて走り廻わらなければなりませんでした。血を集めだして思わぬ難関に突き当ったときは、当人だけが知る苦難でございました。

理屈で申しますと、献血制度というものは絶対に金銭をからませてはなりません。だが実際にはなかなかそうは参りませんでした。皆様から血をいただく段になって、理想と現実の違いをまざまざと味いました。しかし私がこう申しあげても、すべてがそうだと申しあげるわけではございません。むしろ善意の方々の方が大部分だと申しあげなければなりません。尊い血をいただくのです。二三の方々の思い違いなぞ、ものの数ではありまん。善意の湖に、一滴二滴の濁水が流

れこんだとしても、ものの数ではありません。

私のひとり娘リエは東京音大附属高校の二年生でありました。私はリエに言って、クラスメートに献血をたのみ込みました。

ある日リエの担任の上野先生を先頭にクラスメートの生徒達が挙って献血に参加して下さいました。この皆様の御厚情で、妻の余生のあらましが救われました。妻も感謝しながらこの世を去っていったでしょう。

先程、汚点のことを申しあげましたが、一部の人に金銭を要求され、前もって金高を指定してきた人もございましたので、その要求に応じました。そのとき私は一滴の血でも、それが金銭であがなえたら有がたかったからでございます。又当時の私は、そんなことにかかわっているほど心に余裕がなかったからでもありました。ですから、したがって、この人達を恨むというより、これこそ本当の天罰と思い、云うがままに取引を甘んじてお受けいたしました。

個々の人々の血液はそれがたとえ一滴であったにしても、命と同じものだと私は思っております。一人の人間から二〇〇CCの血液を取ることは、その人の命をきずつけることだと思っております。私がこの度経験をしたことは、一度に二〇〇CCの血液を取ることの尊さでありました。

最近新聞紙でみたのですが、全国的に献血が不足をしていて急患に応じられないから四百CCにすると載っておりましたが、これは、とんでもない御都合主義だと思いました。誰が発案したのか、こんなことをしたら、それこそ献血者は尻込みするでありましょう。

私は献血のために出費したことは永久に黙ってすごします。ただ献血者にかかった費用は、私の生活状態からして決して少ないものではありませんでした。それに入院して半月目に病院の会計から医療費請求書を渡たされたその金額は、合計九万七三三円でした。いうまでもなく、これが十五日間の医療費でございました。

実は私も妻の入院する前に、同じ日大の患者でした。勿論入院していたのですが、お金の都合で無理に退院をよぎなくさせられ、通院にきりかえたばかりで御座いました。

妻の死んだのは翌年の三月二十三日午後六時十五分でございましたが。その間、医療費の捻出にいろいろな方面に不義理の借金を重ねました。そうこうしているうちに、とうとう、窮地に追い込まれ、にっちもさっちもならなくなってしまいました。私は万が一を信じて頑張りつづけておりましたが、妻もそのことを心配して自殺まで考えていたようでありまして、妻の死後日記の中から遺言めいた個所があちらこちらに散見されました。

私は過去に自殺の経験をもっておりますが自殺することも容易なことではありません。と申しますのは、まだものを考えたり、周囲を気にしているときは死ねるものではございません。誰が云ったかしりませんが、死ほど楽しいことはないと、何か真意をつかんでいるような気がいたします。当時妻もそうであったように私も、自殺についていつも考えておりました。だがそれは心のどこかにものを考える隙間みたいのものがある限り、そう易々と死ねないものだと思いました。妻は妻でもしわたしが自殺したら夫や子供はどうなるだろう、私は私で自殺したら妻や子供

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com